

2009年2月14日 講義4

講義タイトル： Some Considerations on Constructing <An Anthropology of Craft>

講師：MATSUAI, Takeshi, 松井健（東京大学）

キーワード：craft, (fine)art, industry, development, globalization

要約

工芸：Craft とは

工芸には、産業と芸術の両方の意味がある。匿名の職人によって、時に分業により作り出される工芸品は、高度に機械化された日本においても、失われることなく広く好まれ、残存している。

工芸：Craft と、芸術（美術）：(Fine) Art

工芸と芸術（美術）の区別は、当初からあったものではなく、西洋において成立したものと考えられる。古典期・ルネサンス期にその区別は存在せず、19世紀に「美術」の概念が成立し、資本主義経済が発展するにつれ、定着していった。

日本の工芸、芸術の歴史

中国の模倣に始まった日本の美的表現であったが、次第に独自の表現が現れた。16世紀の茶道の確立により、茶道具が美的表現の極みと見なされ、江戸期に茶道が成熟するに伴い、茶道具の持つ意義は高くなった。しかし、明治維新以降、武士の没落とともに茶道への関心は急速に衰え、西洋的美的価値観が取って代わった。一方、大正・昭和期、柳宗悦らによる民藝運動が、日本の伝統的な美の再発見を促した。

工芸の未来

工業製品や安価な輸入品に比べて高価である工芸品は、価格競争力を持たず、市場原理の中で生き残るのは難しい。工芸の存続には、研究者やNGOなどが、調査地やプロジェクトサイトにおいて工芸品を発見し、リスト化することが一助となろう。伝統的彫金、彫銀などに代表されるエチオピアの工芸にも大きな潜在能力があり、然るべく評価されるべきであろう。

（報告者：佐藤浩介）